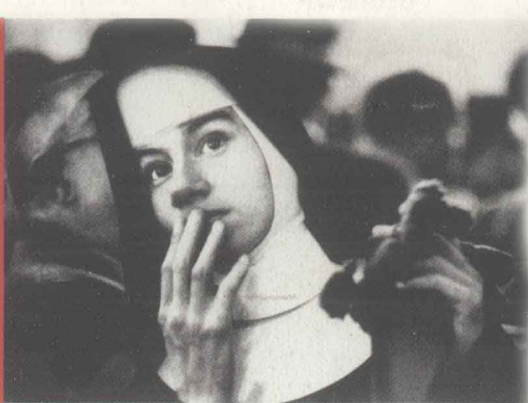


GET
THE
PICTURE



20世紀の瞬間

報道写真家 時代の目撃者たち

PICTURE EDITOR

ジョン・G・モリス

柴田都志子 ● 訳



GET THE PICTURE

20世紀の瞬間

報道写真家 時代の目撃者たち

PICTURE EDITOR

ジョン・G・モリス

柴田都志子 ● 訳

報道写真家——時代の目撃者たち

20世紀の瞬間
せいきのしゅんかん



1999年12月20日 初版1刷発行

著者

ジョン・G・モリス

訳者

柴田都志子……しばた・としこ

発行者

濱井武

ブック・デザイン

熊谷博人

印刷所

萩原印刷

製本所

大日本製本

発行所

株式会社光文社

東京都文京区音羽1-16-6(〒112-8011)

振替 00160-3-115347

電話 翻訳出版編集部=03(5395)8162

販売部=03(5395)8112

業務部=03(5395)8125



落丁本・乱丁本は
業務部へご連絡くだされば、
お取り替えいたします。



© John G. Morris, Toshiko Shibata, 1999



ISBN4-334-96096-0

Printed in Japan



日本書の全部または一部を
無断で複写複製(コピー)することは、
著作権法上での例外を除き、
禁じられています。

本書からの複写を希望される場合は、
日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

デールとミッジに、
わたしたちの子ども、ホリー、ジョン、
クリス、カーク、そしてオリバーに、
そしてタナに。あなたがいないかったら、
この本が世に出ることはなかっただろう。

20世紀の瞬間◎目次

序章 火曜日は『ライフ』に申し分ないDデーだった 1944 10

第1章 『ライフ』に入社 1937 20

第2章 31階のオフィス 1938 28

第3章 「苦しむか戦うか」 1939 42

第4章 「写真屋」 1940 54

第5章 ハリウッド支局 1941 68

第6章 「怒りの日」 1941 78

第7章 最長の待ち時間 1943 92

第8章 ビーチをめざして 1944 110

第9章 「パリが解放された！」 1944 120

第10章 ビアトリスとブルースとメアリー 1946 138

第11章 「世界の人は人」 1947 154

第12章 ミズーリ・ワークショップ 1949 166

第13章 赤狩り 1949 174

第14章 「シャンパンで乾杯！」 1947 182

第15章 「親展」 1953 190

第16章 災厄 1953 208

第17章 決定的瞬間 1954 222

第18章 シムの最期 1955 234

第19章 多難のW・ユージン・スミス 1955 248

第20章 キヤメロットとキューバ 1958 258

第21章 マグナムを去る 1959 266

第22章 「ポスト」紙に転職 1961 278

第23章 49歳で失業 1964 292

第24章 「タイムズ」紙に移る 1966 302

第25章 〈サーデイの店〉で 1967 314

第26章 1968年の銃声 1968 324

第27章 軌道に乗ったエイブ 1969 336

第28章 特別電送写真 1969 344

第29章 さまざまな探究 1974 360

第30章 ジーン以後 1976 368

第31章 『ナショナル・ジオグラフィック』の主役たち 1983 378

第32章 フォトジャーナリズムの都、パリ 1983 390

第33章 湾岸戦争 1990 402

解説

石川文洋

416

主要登場人物索引



Frontispiece : 1942年、ロンドン。戦闘具
で武装したデヴィッド・シャーマン。

LEE MILLER © *Lee Miller Archives*

20世紀の瞬間

火曜日は『ライフ』に申し分ない Dデーだった

一九四四年六月六日火曜日、なぜか朝早く目が覚めた。灯火管制用のカーテンを引いて外を見ると、この日もまたどんよりと曇った空模様だった。イギリスの春とは思えないほど、空気はひんやりしている。路上には人影がなく、ここロンドンのウエストエンド地区のアップパーウィンポール街のアパートには、わたししかなかった。ルームメイトのフランク・シャーシエルは数日前に即時待機の偽装飛行場に向けて出発していた。実は何も言わずに、姿を消したのだが。その飛行場から偵察機に同乗してドーバー海峡を越え、史上最大規模の艦隊を上空から撮影することになっていた。その後方に待機して、カメラマンの撮ってきた写真を編集するのが、『ライフ』のロンドン支局に写真編集者として勤務するわたしの任務だった。

わたしはいつものようにくすんだ色のお仕着せに着替え、ラジオのスイッチを回し、お茶をいれ、新聞に目を通した。むろん新聞には何も報道されていない。するとロンドン時間の午前八時三二分、BBC放送から速報が発表された――「本日早朝、アイゼンハワー將軍の指揮下に連合海軍が、連合空軍の強力な支援のもとに、連合陸軍部隊によるフランス北部海岸への上陸作戦を開始しました」。

「やっつた」とわたしはつぶやいた。「第二次大戦中の偉大な決まり文句」と、後に『ニューヨーカー』のジョー・リープリングが称した、まさにその言葉を発したのだ。す



1944年6月6日、オマハ・ビーチにて。ロバート・キャパの撮影したフィルムのはほとんどは、『ライフ』ロンドン支局の暗室内で発生した事故でだめになった。これは助かった11枚の映像のうちの1点だ。50年後、この兵士がジョージア州アトランタ出身のエドワード・リーガンであることがわかった。

Copyright © 1998 Estate of Robert Capa

ぐさまソーホー地区にあるタイム・ライフ社の事務所に駆けつけた——さしあたって仕事はあまりないとはわかっていたのだが——結局その状態が何時間も続くことになるのである。

この日が来るのを、わたしは八カ月も待ちつづけていた。前の週の土曜日に、偽の警報があったばかりだった。「アソシエイト・プレス（AP）」通信のロンドン支局に勤める若い電信オペレーターが、スピードを上げる練習をしているうちに、誤って情報を流してしまったのだ。「N Y Kアソシエイト・プレス緊急速報。アイゼンハワー本部、連合軍の仏上陸を発表」。この誤報は直後に「先の速報破棄」として訂正されたものの、一瞬、連合軍とドイツ軍双方をパニックに陥れた。

だが今回の報道は本当だった。火曜日は『ライフ』にとって申し分ないDデイだった。ロンドン支局の任務は六月一九日発売の次号のために、戦場写真を用意することだ。ニューヨーク時間の土曜日が締め切りで、翌週の発売になる。

電送写真は質が悪く、また選択が限られるので、役に立たない。しかも、それらの写真は共同利用のシステムで、新聞にも掲載される可能性がある。したがって締め切りに間に合わせようと思ったら、オリジナルのプリントとネガを、それとできるだけたくさん輸送袋に詰めて送り出すしかない。その袋はロンドン時間の木曜日午前九時きっかりに、

グロヴナー・スクエアからバイク便で配送されることになっていた。届け先はロンドン近郊の飛行場に待機している双発機だ。

そこから大西洋横断航路の航空機発着場になっていたスコットランドのプレストウィック空港に到着すると、袋は大型機に積み替えられる。途中で燃料補給のために、二カ所の寄港地を経由して、輸送機はワシントンに到着。ロンドン支局から送られた写真はそこから担当者の手で、土曜日にニューヨークに届けられる。

わたしはこの日に備えて、生のフィルムが戦場からロンドンに到着以降、そのプリントとネガをアメリカへ運ぶ輸送機へ移送するまでの過程で自分の果たす役割を、事細かくリハーサルしていた。その中には情報省の検閲事務所に足を運ぶことも含まれている。この検閲手続きが、今では身近な日常業務になっていた。検閲事務所は裏側がベドフォード・スクエアに面したロンドン大学の、背の高い本館の一階にあった。窓口は二四時間開いていて、検閲官は協力的だった。検閲の業務を行なうのに、われわれがかたわらに座るのを許してくれたのだ。戦死した連合軍兵士の顔や、所属部隊のわかる肩章や、“秘密”兵器（といっても大方はすでに敵軍に知られていたが）を写してならないことは、カメラマンたちも承知していた。

だから検閲とはいえ、事実上は形式的な作業だった。そ

れなのに恐ろしく時間を食うのだ。一枚一枚の裏に検閲済みのスタンプを押し、それがすむと、許可された写真全部をひとくくりにして封筒に収めて封をする。封をするには「出版許可済」と印刷された特製テープが使われる。このテープで封印されていないと、包みは出国できない仕組みになっていた。

この包みをグロヴナー・スクエアで待機するバイク便の配達員まで車で届けるのだが、情報省から二キロも離れていない地点なので、地図を見るかぎりでは簡単そうに思える。しかし直線に近いオックスフォード通りはダブルデッカー・バスで渋滞しがちなので、わたしは平行するコースを開拓した。ホレンからノエル、グレートマルボロー、さらにハノーバーからブルックへと、次々に裏通りを抜けていくのだ（五〇年後の今でも、その道筋を覚えていた）。

このコースをたどると、グロヴナー・スクエアの反対側に出るのだが、最後の五〇メートルは徒歩でも行けた——といっても全力疾走になるのだが。会社から貸与されていた小型のツードアのオースティンは、その場に乗り捨てて夜遅くまで仕事をしているあいだに、車好きの連中がこの車を乗り逃げていくことは珍しくなかった。しかし、それは騒ぐほどの問題ではなかった。ロンドン警視庁に電話を入れさえすれば解決した。どうせ車を盗んでも、燃料タンクには少ししかガソリンが入っていないので、すぐにガ

ス欠になる。だからその地点で車が発見されるに決まっていたからだ。

ノルマンディ上陸作戦の取材には、各通信社のために二人、『ライフ』のために六人のカメラマンの枠が認められた。ただしその中で、Dデイに進攻する米軍歩兵部隊の第一陣とともに上陸するのは四人だけとされた。『ライフ』はどうか二カ所の取材地点を、ボブ・ランドリーとロバート・キャバのために確保した。二人ともベテランのカメラマンだった。

キャバは今回で三度の大戦の中で五度目の前線に従軍したことになる。ポーカーと競馬ではまるでついていなかった彼だが、一九四七年に書いた回想録『ちよっとピンぼけ』の中で、Dデイを前にして自分の置かれた状況を、賭け事にととえてこう説明している——「従軍記者は自分の命という賭け金を手にしており、それを元手に、この馬で行こう、あの馬はどうだと賭けることもできるし、あるいは土壇場になって、その賭け金をポケットにひっこめることだってできる。——でもぼくはばくちが好きだ。だから攻撃の第一陣にはE中隊と行動を共にすることに腹を決めた」。ボブ・ランドリーも、この疑わしい特権を引き受けざるをえないと思った。『ライフ』による他の取材は、カメラマン同士のあいだで割り振りされた。フランク・シャーシ

エルは空軍の親しい仲間と同行した。デヴィッド・シャーマンは海軍を選んだ。ジョージ・ロジャーはバーナード・モンゴメリー將軍が指揮する英軍と行動を共にする。ラルフ・モースはジョージ・パットン將軍の率いる第三軍が担当だったが、進攻はまだ先の予定なので、死傷者を収容する上陸用舟艇に乗り込んだ。ところが結果的に多数の死傷者が出たのである。

最初の写真をもにするのは誰か。悪天候のために、進攻の全体の模様は上空からも（シャーシエル）、海上からも（シャーマン）、うまく撮影できなかった。ロジャーが英軍と共に上陸した地点は無防備の海岸で、いかにも彼らしい控えめな表現によれば、「拍子抜けの態で浜辺に向かった」という。

火曜日には終日、待てど暮らせど写真は届かなかった。攻撃開始早々、米陸軍通信科のカメラマンが命を落としたという噂が立ったが、失ったのは片足「だけ」ということがあとでわかった。その夜遅く、「アクミー・ニューズ・ピクチャーズ」通信のカメラマン、バート・ブランドが海中に足を入れるのもどかしく、そそくさと「第一報写真！」をひっさげてロンドンに戻ってきた。しかしそれは一時的に守りが放棄された海岸への上陸の模様を、乗船していた上陸用舟艇のへさきから撮影したもので、躍動的と

はいえない写真だった。なぜかランドリーの撮ったフィルムは、履いていた靴とともに、行方不明になっていた。

とんだことになった。AP通信が第一陣の四番目の上陸地点の取材を確保していたのはわかっていたが、その日は六人の専属カメラマンの一人も上陸していなかった。こうなると進攻作戦の写真を当てるにできるのはキャバだけとなった。ところが、肝心の彼の行方が知れなかった。時間は刻々と過ぎていく。

日付が変わって六月七日、重苦しい空気の中かで、支局のわれわれは「背景写真」の包みを用意しながら、依然として待ちつづけていた。今や相次いで公式筋から届けられる写真は、どれも迫力に乏しかった。暗室スタッフは全部で五人いたが、彼らは火曜日の午前中から暇を持て余していた。時間がたつにつれて、彼らのあいだにこれから受けるプレッシャーへの不安がしだいにつのっていった。この苛立ちが、それからまもなく生じた大いなるしくじりの原因となるのである。

水曜日の夕方六時半ころ、キャバの撮影したフィルムがそちらに向かったという電話での第一報がドーバー海峡の港から入った。「一、二時間後にはお手元に届くはずです」とはじけるような声がしたかと思うと、回線が途絶えた。わたしはただちにその情報をAP通信の共同利用担当の編集者、E・K・バトラーに知らせた。あだ名が「大佐」と